

母親との関係及び同一性地位概念の形成についての検討

—青年期女子を中心に—

● 野口 舞衣・宮崎 圭子

I. 問題

近年、青年の自立に関する問題が増えてきている。小此木（1978）は、現代青年のしらけや自我分裂、遊び感覚といった特徴に注目し、こうした否定的な特徴を持つ青年群を『モラトリアム人間』と呼んだ。その他にも、「大人・子ども」の状態をあらわす『ピーター・パン症候群』（Kiley, 1983）、理想の男性に守ってもらいたいという願望が強く、自立できない女性のことをあらわす『シンデレラ・コンプレックス』（Dowling, 1981）などの色々な言葉が存在する。さらに、近年ではフリーターの増加もさることながら、ニート（Not in Education, Employment or Training）という、働かず、学校にも通っていない、仕事に就くための専門的な訓練も受けていない若者が増えてきている。そのニートの4人のうち3人以上が親と同居しており、生活費をまかなう収入源の70.1%が家族や親族の給与・収入であること（玄田・曲沼, 2004）、また『パラサイト・シングル』（山田, 1999）という結婚せずに親に甘えながら好き勝手に生きる若者が増えてきていることなどから考えても、青年期に自立できない若者が増えていくことがわかる。

1. 青年期について

青年期は、生物学的、心理学的、そして社会学的の3重の意味において、子どもから大人への移行の期間であると言える（加藤, 1983）。青年期と言うのは、「自分がわからない」「将来が不安で仕方がない」「自分はこの世になんのために生まれたのだろうか」「自分が生きている意味は何だろうか」と言うことが常に悩みの中心にあり、心の問題は大体において「自己」「自分」に深い関係をもっている時期といわれている（鑑, 2002）。Erikson（1959）はこのようなプロセスを経て感じられる自己一致の感覚をアイデンティティとし、青年期後期の発達課題としてアイデンティティ形成を位置づけた。

2. 同一性について

同一性とは Erikson による構成概念であり、彼の後成的・漸成的（epigenetic）発達図式（1959）において、幼児期以来形成されてきた個別的な多数の同一化（identifications）が、青年期に置いて取捨選択され再構成されることによって成立する、社会的かつ現実的な自我の確立の状態として位置づけられている。この極めて包括的で抽象度の高い同一性概念を実証的研究の対象とするために、多くの試みが行われてきているが、それらは同一性を概念化する様式において2群に大別できるとしている（加藤, 1983）。まず第1群は、同一性を「拡散」と「統合」とを両極とする1次元を成すものとしてとらえるアプローチである。同一性の達成の程度は、それに付随すると考えられる諸特徴の水準に基づいて、1次元の上に位置づけられる。ここでは、同一性が成立される過程および機構は、必ずしも問題にされていない（加藤, 1983）。第2の様式は、Marcia（1966）による同一性地位（identity status）アプローチである（加藤, 1983）。Marcia は心理・社会的領域として、職業とイデオロギー（宗教と政治）を設定した。そして内容としては、①社

会的役割を自分のものにする試みや意志を決定する葛藤の期間が示されているかどうか、つまり「危機 (crisis)」を経験しているかどうか、②人生の重要な領域である職業とイデオロギーにおいて、「commitment」が見られるかどうかを基準とした。そして、この「危機」と「自己投入」の有無の組合せから、同一性達成地位 (identity achievement status)、早期完了地位 (foreclosure status)、積極的モラトリアム地位 (moratorium status)、同一性拡散地位 (identity diffusion status) の4つの自我同一性地位を導き出した (Table 1) (無藤, 1979)。

Table 1 Marcia の自我同一性地位群の定義

自我同一性地位	危機 (crisis)	自己投入 (commitment)	概略
同一性達成 (identity achievement)	経験した	している	幼児期からの在り方について確信がなくなりいくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達して、それに基づいて行動している。
モラトリアム (moratorium)	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。
早期完了 (foreclosure)	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和がない。どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ(融通のきかなさ)が特徴的。
同一性拡散 (identity diffusion)	経験していない	していない	危機前：今まで本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像することが不可能。
	経験した	していない	危機後：全てのことが可能だし可能なままにしておかなければならない。

(無藤, 1979)

加藤 (1983) は、Marcia の「危機」及び「自己投入」の概念に着目して、領域を区別しない一般的なステイタスを測定する尺度を開発した。そして、(1)現在の自己投入、(2)過去の危機、(3)将来の自己投入の希求の3変数を測定し、最終的なステイタスは、①同一性達成地位、②権威受容地位、③同一性達成－権威受容中間地位、④積極的モラトリアム地位、⑤同一性拡散地位、⑥同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位のいずれかに分類した。その中で、加藤 (1983) は同一性の形成において「家族との関係」に、ある程度に関連を見出している。

3. 母親と娘の関係について

母親と娘は同性であるため、親子間の心理的距離が近く、親密な関係を築くと言われている。青年期において、母娘関係はアイデンティティ形成、性受容において重要だが、一方で仲の良い母娘関係が危ういとする見方も存在する。母親と娘の緊密な関係は姉妹のような相互依存的な関係の様であるが、両者の人格発達や自立を阻むようなネガティブな面をもった関係であるとも言われている (渡邊, 1997; 北村, 2008)。

小高 (1999) は、青年の親への態度・意識についての尺度を作成し、青年の親への意識の性差を検討した。男子に比べ女子の方が、また女子は父親よりも、母親からポジティブな影響を受け、

母親に対して服従し、母親を一人の人間として認知していた。

長尾ら（2003）の研究においても、「母親からのポジティブな影響」、「母親への服従」、「母親との情愛的絆」において男性より女性の方が高い数値を示した。

田中（2003）は、女子では母親が統制的であるか自律的かよりも、受容的であるか拒否的であるかが自我同一性の確立に重要であることを報告している。一方男子では母親が受容的であるか拒否的であるかよりも、統制的であるか自律的かが自我同一性に重要であることを示唆した。また田中は、父子関係よりも母子関係の方がアイデンティティの発達にはるかに強い影響を及ぼすことを示唆している。

以上のことから青年期の男性と女性ではアイデンティティの形成の経路が異なり、さらに女性は男性と比較してアイデンティティの形成において母親からの影響をより受けやすいと考えられる。

II. 目的

以上より本研究では、青年期女子における母親との関係と同一性地位概念の形成について、学部、学年、身近に感じる人、計3項目に対する違いを検討することを目的とする。

仮説1

同一性地位概念の形成は、学部・学年によって差が出るだろう。

仮説2

母親と娘の関係は、母親を身近に感じるかどうかによって差が出るだろう。

III. 方法

1. 調査対象者

4年制の女子大学の大学3、4年生266名。平均年齢は20.67歳（20歳～23歳）。

2. 調査期間

2011年7月11日～7月25日

3. 調査内容

1) 同一性地位判別尺度（加藤，1983）

Marciaの定義した危機・自己投入に将来への展望を加えた以下計3変数をそれぞれ測定し、その組合せから同一性地位の判定を行うものである。

- (1) 一般的な（領域を特定しない）「現在の自己投入」の水準
- (2) 一般的な「過去の危機」の水準
- (3) 一般的な「将来の自己投入の希求」の水準

各変数につき4項目、計12項目の尺度である（Table 2）。評定は「全くその通りだ」（4点）～「全然そうではない」（1点）の4件法で行った。逆転項目は6項目あり、逆転処理を行っている。

Table 2 同一性地位判別尺度

現在の自己投入
私は今、自分の目標をなしげるために努力している。 私には、特にうちこむものはない。 私は、自分がどんな人間で、何を望みおこなおうとしているのかを知っている。 私は、『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない。
過去の危機
私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない。 私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある。 私は、親やまわりの人の期待にそった生き方をするに疑問を感じたことはない。 私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある。
将来の自己投入の希求
私は、一生けんめいのうちこめるものを積極的に探し求めている。 私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない。 私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている。 私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない。

(加藤, 1983)

2) 親—青年関係尺度 (小高, 1999)

自己評定質問紙25項目からなり、「親からのポジティブな影響の因子」「親との対立の因子」「親への服従の因子」「親との情愛的絆の因子」「一人の人間として親を認知する因子」の5つの下位尺度からなる。母親—青年関係尺度を採用した (Table 3)。評定は「非常によく当てはまる」(4点)～「全く当てはまらない」(1点)の4段階評定であった。

Table 3 母親—青年関係尺度

母親からのポジティブな影響の因子
母親によって人生観が深められた。 母親によって視野が広がった。 母親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。 自分の価値観には、母親の価値観が影響している。 私がかかを決める際、母親の意見は十分参考になると思う。
母親との対立の因子
私と母親の言うことはいつも対立する。 母親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。 私の意見や考え方が母親に伝わらず、イライラすることが多い。 自分の進路、生き方などのことで母親と対立することがある。 母親の価値観に疑問を持っている。
母親への服従の因子

<p>私は母親の言う通りに生きている。 母親には逆らえないで、言う通りになってしまいやすい。 母親の言うことにはいつも従っている。 母親の期待にそった生き方をしている。 自分の意見と母親の意見が違う時、母親の意見に左右されやすい。</p>
<p>母親との情愛的絆の因子</p>
<p>母親に対して感謝の気持ちを持っている。 母親に対してこれからは、親孝行をしたい。 最近、母親のありがたみを感じるがよくある。 自分が今安心して生活できるのは、母親の存在があるからだ。 母親に対していたわってあげたい。</p>
<p>一人の人間として母親を認知する因子</p>
<p>母親も一人の人間だと思って接している。 やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった。 母親のことを一人の人間として客観的に見ている。 母親と私の人生は違う。 自分の生き方は母親の生き方とは独自のものだ。</p>

(小高, 1999)

3) フェイスシート

年齢、学年、学部、普段の生活の中で身近に感じる人(父親、母親、きょうだい、祖父、祖母、同性の友人、異性の友人、先輩後輩、恋人、教員、なし、その他の12項目から選択)を記入してもらった。

IV. 結果と考察

「同一性地位判別尺度」で測定した3領域のそれぞれの平均点は、「現在の自己投入」が2.58、「過去の危機の経験」が2.87、「将来の自己投入の希求」が2.71であった。地位の分け方は、3領域とも平均点以上なら高群、未満なら低群とし、加藤の自我同一性地位の定義より4つの地位

Table 4 自我同一性地位群の定義

同一性地位群	加藤の定義	群分けの基準
同一性達成群	過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っているもの	過去高群かつ現在高群のもの
早期完了群	過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っているもの	過去低群かつ現在高群のもの
モラトリアム群	現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めているもの	現在低群かつ将来高群のもの
同一性拡散群	現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱いもの	現在低群かつ将来低群のもの

(加藤, 1983)

Table 5 同一性達成群の人数分布

同一性達成群	早期完了群	モラトリアム群	同一性拡散群	合計
71	51	59	85	266

に分類した (Table 4)。内訳は Table 5 のようになった。

「同一性地位判別尺度」「親-青年関係尺度」の各変数の、学部、学年、身近に感じる人別の結果は以下ようになった (Table 6～8)。

1. 学部による違いの検討

t検定を行ったところ、5%水準で、マネジメント学部より文学部のほうが過去の危機の経験の程度が大きいことが検証された ($t(264) = 2.23, p < .05$)。

マネジメント学部は、世の中のあらゆる現象をマネジメントの視点から考える学部であり、企業、公共、文化、身近な生活環境、地球規模の問題などに関心のある外省型系の学生が属していると思われる。一方文学部は、人間、文化、社会について探求する学部であり、コミュニケーションや人間のこころなどに関心のある内省型系の学生が属していると考えられる。また過去の危機とは、「これまで、自分について自主的に重大な決断をしたことがある」、「自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある」、「親や周りの人の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことがある」、「以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある」という、自分自身の過去の疑問・迷いと決断を表した因子である。そのため文学部には、自分がどんな人間で何をしたいのか、この生き方でよかったのかと迷い考え決断してきた自分自身の過去の経験から、人間に関心を持ち学びたいと考えた学生が多いと考える。よってマネジメント学部より文学部の方が過去の危機の経験の程度が大きいのではないだろうか。

さらに、5%水準で、マネジメント学部より文学部のほうが一人の人間として母親を認知する程度が大きいことが検証された ($t(264) = 2.32, p < .05$)。

マネジメント学部と文学部については、先述したものと同様である。また一人の人間として母親を認知するとは、「母親も一人の人間だと思って接している」、「やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった」、「母親のことを一人の人間として客観的に見ている」、「母親と自分の人生は違う」、「自分の生き方は母親の生き方とは独自のものだ」という、一人の人間として母親をはっきり認めていることを表す因子である。文学部の学生は、人間に関心を持っているため、母親を一人の人間として客観的に見て、母親には母親の自分には自分の生き方があると考えた学生が多いと考える。よってマネジメント学部より文学部のほうが一人の人間として母親を認知する程度が大きいのではないだろうか。

2. 学年による違いの検討

t検定を行ったところ、1%水準で、3年生より4年生の方が現在の自己投入の程度が大きいことが検証された ($t(264) = 3.38, p < .01$)。3年生はまだ学生の間地点であり、これから就職活動が控えている。一方4年生は、本調査を行ったのが7月だったので、大方の学生が就職活動中である。また現在の自己投入とは、「今、自分の目標をなしとげるために努力している」、「特に打ちこむものがある」、「自分がどんな人間で、何を望みおこなおうとしているのかを知ってい

Table 6 t検定 学部別による差の検討

変数名	学部	N	平均値	標準偏差	t 値	p
現在の自己投入	文学部	141	2.62	0.62	1.09	n.s.
	マネジメント学部	125	2.54	0.55		
過去の危機	文学部	141	2.93	0.50	2.23	*
	マネジメント学部	125	2.79	0.51		
将来の自己投入の希求	文学部	141	2.74	0.45	0.84	n.s.
	マネジメント学部	125	2.69	0.44		
母親との情愛的絆	文学部	141	3.49	0.53	1.28	n.s.
	マネジメント学部	125	3.41	0.49		
母親からのポジティブな影響	文学部	141	2.94	0.63	-0.60	n.s.
	マネジメント学部	124	2.99	0.63		
母親との対立	文学部	141	2.24	0.68	-1.26	n.s.
	マネジメント学部	124	2.34	0.62		
一人の人間として母親を認知する	文学部	141	3.38	0.42	2.32	*
	マネジメント学部	125	3.27	0.40		
母親への服従	文学部	141	2.15	0.52	-1.20	n.s.
	マネジメント学部	125	2.24	0.61		

(* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$)

る]、「『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っている」という、自分自身の現在の目標の自覚と努力を表す因子である。4年生は就職活動を通して否が応でも自身に直面させられているため、今何をしたいのか、社会に出るにあたって自分には今何ができるのかを考え努力し打ちこんでいる学生が多いと考える。よって3年生より4年生の方が現在の自己投入の程度が大きいのではないだろうか。

さらに、5%水準で、3年生より4年生の方が過去の危機の経験の程度が大きいことが検証された ($t(264) = 2.14, p < .05$)。

3年生と4年生については、先述したものと同様である。また過去の危機とは、「これまで、自分について自主的に重大な決断をしたことがある」、「自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある」、「親や周りの人の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことがある」、「以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある」という、自分自身の過去の疑問・迷いと決断を表した因子である。そのため4年生には、先述同様就職活動を通して、自分はどのような人間なのか、自分は何をしたいのか、自分の道はこれでいいのいかと言うことを真剣に迷い考え、自分で決断してきた学生が多いと考える。よって3年生より4年生の方が過去の危機の経験の程度が大きいのではないだろうか。

また、1%水準で、3年生より4年生の方が将来の自己投入の希求の程度が大きいことも検証された ($t(264) = 2.86, p < .01$)。

3年生と4年生については、先述したものと同様である。また将来の自己投入の希求とは、「一生けんめい打ちこめるものを積極的に探し求めている」、「環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない」、「自分がどのような人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの

可能な選択を比べながら真剣に考えている」、「自分がこの人生で何か意味があることができると
 思える」という、自分自身の将来への意欲と探索を表す因子である。そのため4年生には、先述
 同様就職活動を通して、自立し社会に出ていくにあたってこれから何がしたいのか、この先の人
 生で何ができるのかを積極的に探し求めている学生が多いと考える。よって3年生より4年生の
 方が将来の自己投入の希求の程度が大きいのではないだろうか。

また、1%水準で、3年生より4年生の方が一人の人間として母親を認知する程度が大きいこ
 とが検証された ($t(264) = 2.88, p < .01$)。3年生はまだ学生の間地点であり、あらゆる面
 で母親に依存している部分が多いように思う。一方4年生は就職活動を通して社会人になる心構
 えができており、自立の準備をしている。また一人の人間として母親を認知するとは、「母親も
 一人の人間だと思って接している」、「やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった」、「母親
 のことを一人の人間として客観的に見ている」、「母親と自分の人生は違う」、「自分の生き方は母
 親の生き方とは独自のものだ」という、一人の人間として母親をはっきり認めていることを表す
 因子である。4年生は、母親に依存せず自分のことは自分でしようと考えている学生が多いため、
 母親を一人の人間として客観的に見て、母親には母親の自分には自分の生き方があると考え
 学生が多いと考える。よって3年生より4年生の方が一人の人間として母親を認知する程度が大
 きいのではないだろうか。

3. 身近に感じる人の違いの検討

一元配置の分散分析を行ったところ、「母親との情愛的絆」において0.1%水準で有意差が検証
 された ($F(7, 258) = 4.34, p < .001$)。その後多重比較をした結果、きょうだいを身近に感じる

Table 7 t検定 学年別による差の検討

変数名	学年	N	平均値	標準偏差	t値	p
現在の自己投入	3年生	179	2.50	0.57	-3.38	**
	4年生	87	2.75	0.59		
過去の危機	3年生	179	2.82	0.52	-2.14	*
	4年生	87	2.96	0.48		
将来の自己投入の希求	3年生	179	2.66	0.45	-2.86	**
	4年生	87	2.82	0.43		
母親との情愛的絆	3年生	179	3.45	0.48	-0.16	n.s.
	4年生	87	3.46	0.58		
母親からのポジティブな影響	3年生	178	2.94	0.62	-0.59	n.s.
	4年生	87	2.99	0.65		
母親との対立	3年生	178	2.27	0.60	-0.46	n.s.
	4年生	87	2.32	0.76		
一人の人間として母親を認知する	3年生	179	3.28	0.41	-2.88	**
	4年生	87	3.43	0.40		
母親への服従	3年生	179	2.22	0.55	1.00	n.s.
	4年生	87	2.14	0.60		

(* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$)

人より母親を身近に感じる人の方が母親への情愛的絆を感じている程度が大きいことが検証された。また、同性の友人を身近に感じる人より母親を身近に感じる人の方が母親との情愛的絆を感じている程度も大きいことが検証された。母親との情愛的絆とは、「母親に対して感謝の気持ちを持っている」、「母親に対してこれからは、親孝行をしたい」、「最近、母親のありがたみを感じることがよくある」、「自分が今安心して生活できるのは、母親の存在があるからだ」、「母親に対していたわってあげたい」という、母親をいつくしみ愛する気持ちを表す因子である。よって母親を身近に感じる人は、母親への情愛的絆を感じていることと同義と考えて良いだろう。

また、1%水準で「母親からのポジティブな影響」に有意差が認められた ($F(7,257) = 3.20, p < .01$)。その後多重比較をした結果、きょうだいを身近に感じる人より母親を身近に感じる人の方が母親からのポジティブな影響を受けている程度が大きいことが検証された。母親からのポジティブな影響とは、「母親によって人生観が深められた」、「母親によって視野が広がった」、「母親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う」、「自分の価値観には、母親の価値観が影響している」、「自分が何かを決める際、母親の意見は十分参考になると思う」という、母親から受けている積極的な影響を表す因子である。よって母親を身近に感じる人は、母親からのポジティブな影響を受けている程度が大きい人と同義と考えて良いだろう。

4. 今後の課題

今回、青年期女子の同一性地位と母親と娘の関係を調べたが、同一性の問題を考える上で、青年期男子の同一性地位、また父親と娘など家族の関係も検討する必要があるように思う。これは今後の課題だろう。

VI. 謝辞

本研究に被験者として参加し貴重な意見を頂いた学生の方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。

Table 8 分散分析 身近に感じる人別による差の検討

(上段：度数，中段：平均値，下段：標準偏差)

変数名	父親	母親	きょうだい	祖母	同性の友人	異性の友人	恋人	その他	合計	F 値	p
現在の自己投入	5	164	21	2	50	3	17	4	266	0.50	n.s.
	2.64	2.56	2.77	2.75	2.54	2.67	2.62	2.75	2.58		
	0.27	0.58	0.56	0.71	0.64	0.29	0.71	0.35	0.59		
過去の危機	5	164	21	2	50	3	17	4	266	1.00	n.s.
	2.55	2.89	2.89	3.25	2.86	2.75	2.66	3.06	2.87		
	0.45	0.52	0.48	0.00	0.52	0.25	0.40	0.59	0.51		
将来の自己投入の希求	5	164	21	2	50	3	17	4	266	0.99	n.s.
	2.70	2.72	2.85	3.25	2.66	2.50	2.65	2.63	2.71		
	0.33	0.43	0.46	0.00	0.52	0.25	0.43	0.25	0.45		
母親との情愛的絆	5	164	21	2	50	3	17	4	266	4.34	***
	2.96	3.57	3.20	3.70	3.27	2.93	3.41	3.45	3.45		
	0.22	0.45	0.75	0.14	0.51	0.61	0.55	0.41	0.51		
母親からのポジティブな影響	5	163	21	2	50	3	17	4	265	3.20	**
	2.92	3.08	2.62	3.60	2.83	2.40	2.74	2.70	2.96		
	0.64	0.56	0.75	0.57	0.66	0.60	0.62	1.10	0.63		
母親との対立	5	163	21	2	50	3	17	4	265	2.44	**
	2.96	2.20	2.59	2.30	2.42	2.53	2.11	2.20	2.29		
	0.55	0.66	0.62	1.27	0.54	0.64	0.54	1.17	0.65		
一人の人間として母親を認知する	5	164	21	2	50	3	17	4	266	1.13	n.s.
	3.08	3.31	3.45	3.70	3.32	3.07	3.42	3.25	3.33		
	0.11	0.40	0.39	0.42	0.41	0.50	0.46	0.90	0.41		
母親への服従	5	164	21	2	50	3	17	4	266	1.25	n.s.
	2.56	2.25	2.07	2.00	2.11	2.27	1.96	2.15	2.19		
	0.22	0.55	0.73	0.57	0.59	0.50	0.48	0.62	0.57		

(*: p<.05, **: p<.01, ***: p<.001)

Ⅶ. 引用文献

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the lifecycle*. New York : International Universities Press.
(エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
- Dowling, C. (1981). *The Cinderella complex: Women's hidden fear of independence*. Summit Books
(コレット・ダウリング, 柳瀬尚紀 (訳) (1985). 全訳版シンデレラ・コンプレックス—自立にとまどう女の告白 三笠書房)
- 玄田有史・曲沼美恵 (2004). ニート：フリーターでもなく失業者でもなく 幻冬舎
- 加藤厚 (1983). 大学生における諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- Kiley, D. (1983). *The Peter Pan syndrome: Men who have never grown up*. Dodd, Mead.
(ダン・カイリー, 小此木啓吾 (訳) (1984). ピーター・パン・シンドローム—なぜ、彼らは大人になれないのか 祥伝社)
- 北村琴美 (2008). 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性—愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連— 心理学研究, 79, 116-124.
- 小高恵 (1999). 青年の親への態度・意識についての尺度作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集, 39, 174.
- 黒藤清子 (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187.
- 長尾あゆみ・笠井仁・鈴木伸一 (2003). 青年期の親子関係と友人への依存性に関する研究 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 2, 22-35.
- 小此木啓吾 (1978). モラトリアム人間の時代 中央公論新社
- 田中正 (2003). 青年期男子における親の養育態度と自我同一性との関係 名古屋文理短期大学紀要, 27, 1-4.
- 鑓幹八郎 (2002). アイデンティティとライフサイクル論 (鑓幹八郎著作集Ⅰ) ナカニシヤ出版
- 山田昌弘 (1999). パラサイト・シングルの時代 筑摩書房
- 渡邊恵子 (1997). 青年期から成人期にわたる父母との心理的関係 母子研究, 18, 23-31.